

「断つ・保つ」® の技術の結晶である製品やサービスを生み出す当社グループの研究開発と生産体制。事業本部と連携しながら社会に役立つものづくりに取り組んでいます。

研究開発

研究開発本部長メッセージ

ニチアスの技術基盤である「断つ・保つ」は、多様な産業分野のお客さまとともに進化を続けてきました。

近年は脱炭素化の進展や半導体分野の高度化などにより、求められる技術は一層高度かつ多様化しています。こうした中、当社はシール、断熱、防音、耐火、耐食、クリーンの「6つの技術」を核に、高機能化と用途拡大を進めています。加えて、水素をはじめとする次世代エネルギー分野や先端半導体分野への対応を強化するとともに、バックキャストの視点による課題創出を目指して活動を推進しています。

さらに研究開発DXの取り組みにより開発効率と精度を高め、競争力の向上を図り、社会実装までを見据えた研究開発体制の強化にも取り組んでいます。これらを通じ、持続可能な社会の実現に貢献してまいります。



研究開発本部 本部長
岩田 耕治

■ 注力している取り組み

1. 情報通信・半導体分野

情報通信機器の高速化・高周波化に伴い、材料への要求は一層高度化しています。高速高周波基板用途では低誘電損失を有するふっ素樹脂材料が注目される一方、熱膨張や接着性といった課題が存在します。当社はふっ素樹脂複合化技術および独自成形技術を基にこれらの課題解決を進めています。また、半導体製造工程の高度化に伴い環境がより過酷になる中、高機能ゴムの分野では架橋技術や配合技術を一層高度化し、耐熱性・耐久性に優れた製品開発を推進しています。

2. 次世代エネルギー分野

水素社会の実現に向け、「つくる」「はこぶ」「ためる」「つかう」の各領域で当社の技術が求められています。2026年3月には浜松研究所に水素実験棟が完成し、極低温領域における評価技術の確立および関連製品開発を加速させています。これにより液体水素やアンモニア等に対応した断熱・シール技術の高度化を進め、安全性と効率性の両立を図るとともに、評価・設計技術の強化を通じて実用化を強力に推進してい

ます。さらに、極低温評価技術は水素以外にも展開できる重要技術であり、実証データの蓄積と解析を通じて信頼性向上を図り、幅広い用途展開を見据えた開発を進めています。



水素実験棟（浜松研究所）

革新的技術の創出を図ります。異分野連携を通じた新たな発想の取り込みにより、従来の延長線上にない研究開発を加速していきます。

さらに、研究開発DXの推進も重要課題であり、情報の蓄積・共有の高度化やMI (Materials Informatics)、AI技術の活用を進めています。これらを担う人材の育成にも注力し、「断つ・保つ」の技術とデータ活用力を兼ね備えた人材を育成することで、研究開発の質とスピードを高め、持続的な成長を支える基盤を一層強化していきます。

■ 今後の課題や展望

当社はこれまで顧客密着型の研究開発を強みとして、多様なニーズに応じた技術ソリューションを提供してきました。今後はコア技術のさらなる深化に加え、社会課題や将来ニーズから逆算するバックキャストの視点を取り入れた課題創出を強化し、中長期的な価値創出につながる研究開発テーマの発掘に取り組んでいきます。

また、オープンイノベーションの推進においては、ナノテラスを含む共創研究の活用を進めるとともに、大学や研究機関、スタートアップとのマッチングを強化し、多様な知見の融合による

生産

生産本部長メッセージ

近年の技術革新は目覚ましいものがあり、あらゆる分野で急激に変化し今後も継続すると予測されますが、この変化に対する対応の成否は当社にとっても機会やリスクになると受け止めております。

またものづくりにおいては、企業の社会的責任として温室効果ガス排出削減、資源循環、自然共生社会実現などの環境課題への対応や、今後ますます深刻化するであろう労働力不足への対応、サプライチェーンの強靱化に向けた取り組み、さらには自然災害に対する防災対策も不可欠となってきました。

当社グループの生産活動において、これらの課題や変化に対応すべく、生産戦略の展開とものづくりの進化に取り組んでおります。

また、新しい技術への積極投資とともに、既存の生産技術の見直しと強化にも積極的に取り組むことにより、将来を見据えた人材の育成、生産技術力の向上を図ってまいります。



生産本部 本部長
浅田 啓起

■ 注力している取り組み

生産本部では次の4つの重要方針に取り組んでおります。

1つ目は『安全安心で安定したものづくり体制の構築』です。お客さまに信頼される品質の確保はもとより、従業員や地域住民の皆さまが安心できる工場を目指し、安全活動や作業環境、地域環境等の課題に積極的に取り組むとともに古い建屋の耐震補強など防災・減災対策にも力を入れております。

2つ目は『将来を見据えた生産資源の確保』です。生産戦略に基づき、建屋や設備への投資、BCPを意識した資材の調達、生産技術力向上につながる人材の育成に取り組んでおります。

3つ目は『環境負荷低減活動の推進』です。脱炭素、資源循環、自然共生への取り組みを国内外グループ全体で推進してまいります。

4つ目は『ものづくりの進化と効率化』です。国内労働人口の減少と事業変化に柔軟に対応できる様、自動化やDX推進、AI

の活用など新しい技術を積極的に取り入れ労働生産性の向上を図っております。



鶴見工場厚生棟
従業員の食堂、休憩所と自動倉庫を兼ねた新建屋

■ 今後の課題や展望

今後の社会は、AIの普及拡大、エネルギーの転換、災害リスクの増加、労働人口減少による労働力不足等、さまざまな変化が予想されます。その中で生産体制へ課せられる課題は多々ありますが、今まで以上に自動化による省人化、省力化を加速させ、さらに生成AI等を活用したスマートファクトリーを目指したものづくりを進めてまいります。

一方では、130年の歴史を支えてきた古い設備、技能も多く、設備の維持管理、技能の見える化、生産技術の改善や進化にも積極的に取り組んでいく必要があります。

新しい技術の取り込み、既存技術の向上を進めていくためにも必要不可欠なものは人材の確保と育成です。新卒採用、経験者採用、必要に応じて外部リソースの活用、研修制度や課題

推進を通じたOJTなど、次世代を担う人材の確保、育成に取り組んでまいります。

今後も国内外製造拠点とともに“人と地球にやさしいものづくり”を目指していきたいと思ひます。



鶴見工場厚生棟での無人搬送フォークリフト 手作業の自動化に導入された協調ロボット